

Newsletter

February 2008

<http://www.aack.or.jp>

目次

ラダック・ザンスカール トレッキング紀行	1
―ザンスカールの峠「シンクラー SHINKUL LA」(五〇八〇E)を越え て北インド平原へ―(前編)	1
松浦祥次郎……………	1
スコットランドの山に登る	8
中島道郎……………	8
OKYAN'2007の報告	11
(兵庫県 砥峰高原と藤無山の山行記録)	
潮崎安弘……………	11
AAACK人物抄	12
宮木靖雅	
(一九四〇年四月〜一九七一年七月)	
平井一正……………	12
日本山岳協会・山岳共済の案内	15
事務局連絡	17
会員動向	17
編集後記	18

ラダック・ザンスカール トレッキング紀行

―ザンスカールの峠「シンクラー
SHINKUL LA」(五〇八〇m)を越
えて北インド平原へ―(前編)

松浦祥次郎

二〇〇七年八月二二日から九月
二六日にかけての旅で、「天空の
地」とも呼ばれているラダックに入
り、その風光と風物に触れながら、
途中約二週間ザンスカール河源流の
渓谷をトレッキングした。九月一三
日に目標のシンクラー峠越えをし

て、チベット仏教世界からヒンズー
教世界へ入った。メンバーは阪本公
一リーダー(グド、一九六〇年入部)、
谷口朗(クロ、一九五七年入部)、
福本昌弘(ポテシャン、一九五七
年入部)、伊藤寿男(一九五九年入
部)、八太幸行(阪本の山城高校山
岳部同級生)、松浦祥次郎(コッテ、
一九五四年入部)の六名。平均年齢
約六九歳の準高齢パーティ。

計画立案・準備から出発まで

ほとんどの遠征や山行の計画は、
誰かの想いに拠る提案に対して、同
じではないにしても共通する想念を

持つ仲間が集まって話が進むよう
である。今回のトレッキング計画は、
阪本がカラコルムやネパールでのト
レッキングや山行を続けつつ、数年
来暖めてきたラダック・ザンスカ
ールへの憧れと、念入りな準備がイニ
シアティブとなり、そこへ高所へ長
年行きたくても行けなかった古くか
らの山岳部仲間が飛びついて出来上
がったものだった。阪本の原計画で
は少し違ったメンバー構成になっ
ていたが、不幸な事情で欠員が生じ、
松浦はその空所に入れてもらうこと
が出来た。まさに僥倖であった。

かような次第で、山岳部時代の年
次などは全く関係なく、現在の実力
と経験に従い、当然のことのように
阪本にリーダー役をゆだねることに
なった。阪本はリーダー役のみでな
くトレッキングその他旅程計画の詳
細立案、出発までのトレーニング計
画とパーティづくり、諸資料準備と
学習アドヴァイス、現地トレッキン
グ・エージェンツとの交渉、食料計
画と調達、装備計画と準備、薬品計
画と準備、航空券購入ほか旅行手続
き、入費概算など万般を周到に進め
てくれた。勿論、独断専行ではない
が、全メンバーはリーダーの準備進
捗に感謝しつつ、それについて行く
のに必死でもあった。しかし、万事
について年齢を良く考え十分な余裕

り、我々はニューデリー到着時に、入国審査の後で税関までの間にある免税店で、各自〇・五リットルボトル二本づつを購入して、下山時の祝杯に備えた。また、ここで会計担当の伊藤と阪本リーダーは予定の両替をした。現金をどのように持ち歩くかも重要事項であり、安全第一に全員多少の不便は我慢して胴巻きに収めておくこととした。

ニューデリー空港にはトラベル・エージェンツのツェリン・トプギャルがチベット風にかたを手にして出迎え、大混雑の中で我々を簡単に見つけてくれた。無事にホテルに到着し、インド入りを祝して乾杯後二三時三〇分就寝。ホテルは高級ではないが空調もあり、宿泊費も利口で、トレッキング客向きであった。

二三日からは起床時の測定に脈拍、体温のほか血中酸素濃度率が加えられた。この日は市内で下山後の観光の予約をした後、考古学博物館を見学し、明朝に備え一九時就寝。

二四日午前一時起床。ラダックの主都レー

(標高三五〇〇m) 到着に備え阪本リーダーのアドヴァイスでダイアモックス錠を飲む。二時に空港に向け出発しようとした寸前に、航空券のトラブルが発覚した。八太の航空券がリストから洩れていたのだ。原因は、最初の予約メンバーが病欠となり、八太に交替したのだが、阪本リーダーからエージェンツへの再々の確認連絡にも拘わらず、それが適切に処理されていなかったのだ。とにかく空港で対処する以外ないということで、空港に向かった。幸いにも予定のフライトに空席

があつたので、チケットを購入することが出来、全員そろってレーに到着することが出来た。もし空席が無ければ、八太はトレッキング荷物とともにレーまで二泊三日の厳しいパス旅行を余儀なくされるところであつた。この種のトラブルへの対処も考えておく必要がある。

ラダックと主都レー

空路がラダックの主都レーに近づくといインドの近辺以外は全くの乾燥地帯であることが一目で印象付けられる。この地域は年間の晴天日数が三〇〇日前後、降水量が約八〇mmと記録されている。ラダックはインド最北部のジャンムー・カシミール州の一部で、北西から北にインド・パキスタン間の、北から北東にインド・中国間の停戦ラインに面しているためか飛行機に乗り込む際のセキュリティチェックは何度も念入りであつた。レー到着時の手続きもインド入国時と同様の入域カードの提出を求められた。

ラダックというのはチベット語で「峠の向こう」の意であるとのことである。大ヒマラヤ山脈北西部の北側、カラコルム山脈の南側、インダス河の源流域であり、さらにその地域の中を標高六〇〇〇m級のラダック山脈とザンスカール山脈が北西から南東方向にかけて横切っている。従つて、外部からこの地域に入る場合は勿論、地域内の移動も高い峠を越えるか、溪谷沿いの道を辿らざるを得ない難地である。別の見方をすれば、多彩・多様なトレッキングルート宝库でもある。レーで

入手したラダックの説明パンフレット表紙の副題に「限らない発見の地」とあつたものなるほどと感じる。

このような地形が形成された理由については、「ラダックは地質学的には比較的新しく形成された土地である。二〇〇〇〜三〇〇万年間、インド亜大陸がアジア大陸を押し上げた際、押し上げられた地殻が極端な力で強く褶曲され、それが氷河と烈風の浸蝕を受けて形成されたものと考えられる。」というのが地質学的説明である。車での移動中も、トレッキングの途中でも、この説明が納得できる地形を常時見ることができた。また、これは多くの高峰への登頂が極めて難しいことを意味している。松浦が「この地域の最大の天災は何か」とガイドに質問した時の答えが「最も厳しい天災は強風です」ということであつたのは風蝕の厳しさを裏付けけるものであろう。上のような造山活動で出来たラダック地形の標高最低はカルギルの二七五〇m、最高はサセル・カンリ(カラコラム)の七六七二mである。また高地のため空気は薄く、日差しが低地よりずっと強い。人が日向に座り、足を影に入れておくと、同時に日射病と凍傷になるのはラダックだけだとの冗談のような話がある。

ラダックに何時ごろから人々が定住を始めたかは余りはつきりしていないようである。しかし、一〇世紀の中期から約九〇〇年間ほどはチベット系の王国が地域を統治し、政治的に比較的安定していた。そして、チベットに騒乱が起こる毎に難を逃れる民やチベッ

ト仏教僧がこの地に逃れて来た。それゆえ、チベット仏教に基礎を置くチベット文化がこの地域の基底文化となり、現在もその状況が継続している。いまではチベットよりも変質を受けていないより純粹なチベット文化が、むしろこの地に保持されていると言われるほどである。他方で時期により西方からイスラム系の人々も移って来ていた。従って、ラダック西部のカルギルはイスラム圏となつている。しかし、インド北部平原からヒンズー教系の勢力はここへは及ばなかったようだ。またかなり長い期間、ラダック王国の首都レーは南方のパンジャブ地域とカラコルム峠の新たな中央アジアのヤルカンド地域をつなぐルートの要衝であり、チベットのラツサからのルートのターミナルでもあった。ラダックがチベット仏教徒の社会とイスラム教徒の社会のモザイクであったことが、第二次世界大戦終結後のインド独立時にラダックに極めて難しい問題を生じた。当時、ラダックはチベット仏教徒の藩王（ラジャー）が治めていたが、イスラム教徒もかなり居住していた。インドとパキスタンの分離独立時に、ラジャーの決断でラダックはインドの統治下に入ったが、イスラム教徒の反発は大きく、これがその後の数次にわたるインド・パキスタン戦争の原因となり、現在も解決には遠く停戦ラインの設定で実効支配域による平衡状態が現実となつている。現代史的に極めて深刻な問題は、両国間の緊張状態が両国の核武装の誘引となり、これが更なる契機となつて核武装国増加の懸念を世界的に拡散していることであ

る。ラダックの平和が保たれない限り、せつかくのトレッキングの宝庫は閉ざされた夢になるであろう。

この地域が長年外国人の入域を厳しく制限していた所為でもあろうが、ここへの日本人の訪問は極めて少ないようである。阪本リーダーの調査でもほとんど記録が見つからなかった。今回のトレッキング中も日本やアジア諸国からのパーティに出合う事は無かった。一方欧米からのトレッカーはかなり多い様子で、トレッキング中も毎日のように欧米からのパーティに出会った。ネパール系のエージェンツがアレンジしているパーティに出会ったことから推察すると、ネパールのトレッキングの繁忙から目を転じるトレッカーが増加しているのでもあろうか。レーのツーリズムビジネスの拡大ぶりを目にするラダックのトレッキングが欧米で一段と関心を高めつつあるように思われる。

レーはかつてラダック王国の首都であった。現在もラダック地方最大の町である。とは言え、人口約二五〇〇〇人程度であり、市街地は徒歩で十分に見歩くことが出来る大きさである。地方行政や経済の拠点であると同時に、文化や宗教（チベット仏教）の中心でもある。

我々が二四日から三〇日朝まで滞在したホテル・カニカ (KANIKA) は町の中心から少しはずれた静かな場所にあった。部屋からはインダス河のかなたにストック山脈と主峰ストックカンリ (Stok Kangri 六三二〇m) をすつきりと望むことが出来た。この景観が

ザンスカールの山並みとの初めての対面であった。

どのような旅行でも、最大の関心事は食事である。ラダック最初の食事は、カニカホテルでの二四日の昼食であった。春巻、ヌードル、チャーハン、スープ二種（野菜、チキン）、そしてティーといろいろ出された。味はまずまずで、これならと全員安堵した。しかし、同時に食べすぎと油質に注意しようと思いついた。この後も、ホテルの食事、市内のレストランのメニュー、ゴンパ付属のレストラン、いずれにおいても食事の味と価格にメンバーから不満は出なかった。

食後、旅行エージェンツ「ザンスカール・トレック・Zanskar Trek」の社長 Stansen Lakpa が予定通りやつて来た。契約を再確認のうえ、阪本リーダーから予定金額の支払いがなされた。これで全旅程が確定された。ザンスカール・トレックは、阪本リーダーが接触を試みたレーの数社の旅行エージェンツ中で最も誠実に対応してきた会社で、以来彼は二年間連絡交渉を重ねて計画を精緻に準備した。社長のラクパはザンスカール渓谷奥地の出身で、立志伝中の人物と見える。会社のスタッフをザンスカール渓谷出身者で固め、ザンスカールのトレッキングを重点としているようだ。社業の他、全ラダック仏教協会副会長の活動をしている。我々のトレッキングに用意されたガイド、クック、馬子など要員は全てザンスカール渓谷出身者であった。

レーはその高みにかつての王宮が屹立し、麓に住居が集まる典型的な城下町と言えるた

たずまいである。特にこれといった特徴は無く、どこの観光都市とも同様に中央の大通りにはレストラン、土産物店（カシミヤ／パシミア、仏具、トルコ石製アクセサリー）、書店、インターネットカフェなどが軒を連ねている。昔ながらの風習が残っているかと思われるのは、大通りの道端でおばさん達が座り込んで自家製と見える野菜や花を売っていることだ。大通りはずれ小路に入ると昔ながらと思われる竈でナンを焼いている店が続いている。また、共通の水場で女性が洗濯をしていたりもする。目立つのは、ホテルやゲストハウスの新築工事が多いこと、小型車がやたらに多いこと、それと飼い主のなさそうな犬がやたらに多いことだ。有難かったのは、安い価格で飲料水を供給する売店があったことだ。欧米人の観光客やトレッカーがかなり多いように見られた。

チベット仏教の拠点としてのレーの存在は、近郊のチョゲラムサルに建っているドライラマ宮殿（ジワツアル）と、同所のチベット難民キャンプ近くに二〇〇七年八月に開所された「仏教学中央研究所・Central Institute of Buddhist Study」に象徴されている。前者はドライラマが時々レーを訪れる。前者はドライラマが時々レーを訪れる。信徒に講話をする拠点であり、宮殿に隣接して広いフィールドが設けられている。講話の時はレー近辺のみでなく方々から信徒が集まり、さしものフィールドが四万もの聴衆で溢れるそうである。研究所は、インド政府とドライラマからの支援で設立されたものである。我々はここを一八日に見学させてもらった。

た。最大のチベット難民キャンプはヒマラヤ山脈南側のドラムサラにあり、そこにドライラマ亡命政府があるが、レーも極めて重要な拠点であることをこれらが示している。

高所順応

レーではホテルを拠点に六日間にわたりザンスカールでのトレッキングに備え、市内及び近辺のゴンパへの参詣、幾つかの施設への訪問を行った。二四日午後には手始めに、市内にある「Women's Alliance Center」を訪問した。これは「Ancient Future Learning From Ladakh（日本語訳「ラダック、懐かしい未来」）の著者ヘレナ・N・ホッジが環境保全をしながら、もったいない精神を活用して人間生活の漸進的進歩を図ろうとの活動の中心であり、この活動に世界各地から多くの若者が参加している様子が伺える。

二五日からは、阪本リーダーの計画を基本にしながらい現地を参考にして適宜調整を加え、レー近辺のゴンパ参詣を中心にチベット文化に触れる施設訪問を次のように行った。余り性急でなく、また休みすぎることなく行動した所為か、全メンバーの高所順応と環境への適応は順調に進んだ。

二五日（土）午前は町の背後の丘の肩に聳え立つ旧王宮と頂上のツェモ・ゴンパ、午後は町外れでインドスに近いスピトク・ゴンパへ。

二六日（日）インドスや上流のタクトク・ゴンパ（三八八五m）、チェムレイ・ゴンパ（三七四〇m）、その対岸のヘミス・ゴンパ

（三七四〇m）。

二七日（月）カスパン瞑想院（四三六〇m）、テイクセイ・ゴンパ、シェイ旧王宮、チョゲラムサルのチベット村。

二八日（火）インドス対岸のマト・ゴンパ、スタクナ・ゴンパ、ストック・ゴンパ、仏教学中央研究所（Central Institute of Buddhist Study）。

二九日（水）LEDeG Center（Ladakh Ecological Development Group Center）、再度 Women's Alliance Center を訪問、午後は自由行動。

週末の土、日はザンスカール・トレックからガイドとしてロブソン・ナワン（一八歳）が付けられた。彼は赤い衣を着けた修業



Stok Kangri 6123m

僧で、週末にエージェントを手伝っている。

若い人が良く勉強しており優秀な青年だ。そして、彼はザンスカールの出身者だ。パダム隣村のカルシャの生まれという。月曜日からは、旅程の最後までガイドを務めるツェワン(Tsewang)が付けられた。彼もカルシャの出身で、ニューデリー大学の大学院生、ツーリズム専門コースを専攻している。こちらも夏休みで働いている。チベット仏教の教養が深く我々の良い質問相手になってくれた。

王宮やゴンパは高所に建設されており、いずれもそこからのインダス上流・下流の眺望はまさに絶景である。一目で理解されるのは、インダス河岸付近で灌漑の可能な場所、高所に氷河を持ち渓谷からの灌漑がなされている場所以外は、全く緑がないことである。水と命の生育の関係が厳しく鮮やかに示されている。時期はちょうど麦やジャガイモの取り入れが始まるころであった。

乾燥、低温、強風と言う厳しい自然条件の故か、材木になるような大きい木はまるで見当たらない。せめても材になる木は柳とポプラで、谷口の説ではこれらは決して良材ではない。しかし、王宮やゴンパの修復の様子を見ると、これらを工夫して使用している。一般に柱に使えるような太い木が入手困難なためか、伝統的建築物の垂直構造は日干し煉瓦で作られ、天井は細い柳やポプラの束を重ねて作られている。この構造は、王宮もゴンパも一般の家屋も同様である。こゝへ行っても、建築物の基本的な形状はほぼ同一である。一方で鉄筋コンクリート構造の新しい建築物が

増えつつある。

レーでの滞在を終えた段階で、標高四〇〇〇m近くまでの順応はひとまず出来たようであった。全員の体温、脈拍、血中酸素濃度率に異常はない。食事の変化により腹具合が多少不調なメンバーもあったが、旅程に影響するほどのことは無かった。高度順応に効果的と言われているダイヤモックスについては、阪本リーダーのアドヴァイスに従い半錠づつを適宜服用することとした。はつきりとした高度影響を自覚したメンバーは無かったが、就寝中に日常無い違和感を覚えたメンバーがいた。それが高度によるものかどうかははつきりしなかった。結果的にレーでの滞在中のゴンパ参詣等を通じて、ザンスカール河源流渓谷最奥のラカン(Lhakang)付近までの高度順応がほぼ出来たことになった。

出発前夜に、以後ダルチャまでは禁酒とすることを申し合わせた。

レーからザンスカール中心パダムへ

いよいよザンスカールに向け出発の日になった。ラマユル、カルギルを経て二泊三日の車の行程である。八月三〇日(木)八時半過ぎ、二台の車に分乗して出発する。レーに着いた時はまだ青いところが目立った麦畑もすっかり黄ばんでおり秋が近づいていることを感じさせる。三〇日の宿泊予定地のラマユル(Lamayuru)近くまで道はインダスに沿っている。道はよく整備されており、そして辺境防備の軍の施設が多くみられる。ポリスの

チェックポイントもところどころにある。このようなところでは、一行のパスポートデータの一覧表が非常に有効である。これによって一々のパスポート提示が求められることが多い。阪本リーダーはこの点も抜かりが無い。

ネモ(Nemo)近くのインダスとザンスカール河との合流は話の通り印象的なものだ。ザンスカールからの氷河融水とインダス本流の水の色との差がくつきりと見える。途中、リキール・ゴンパ、アルチ・テンブル、リゾン・ゴンパに参詣する。リキール・ゴンパは一九九七年に建立された金色の大観音像がある。ガイドのツェワンの説明では、観音様はいつも立っているか、腰掛けているのがお姿で、決して如来様のように結跏趺坐はしておられない。それはいつもすぐに人を救いに行かなくてはならないからだ、とか。すると、京都太秦広隆寺の百済観音の半跏不座は特別のものであろうか。

渓谷は一般に広いが、時には急峻な傾斜地を横切るところもあり、落下した車も目にする。スピードを抑えれば安全だが、道の良さが仇になるようだ。ラマユル少し手前でインダスを離れ、山路になる。

ラマユル近くの風景は、全く独特だ。一瞬に月世界との感じをもったが、Moon Land Spotと書かれた観光ポイントがある。岩山の景観が此処だけ黄灰色の土質層が水と風の侵食を受けた風景である。宿舎の名もムーン・ランドであった。ちょうど十七夜頃の月が東の岩稜に立つラマユル・ゴンパの空に上る様



カルギル手前から眺める Mt. Naktul 5562m

子は見事であった。この土地は湖が干上がった出来たという伝説があるという。そう言われれば素直に「なるほど」と言いたくなる景色だ。

八月三十一日(金)、八時出発。宿舎を出てすぐにラマユル・ゴンパを参詣する。大変に歴史の古いゴンパで、チベット仏教カギユ派の祖師の一人で、密教行者のナローパが開祖とされている。古くからのチベットとの往来が想像される。周辺の風景はいかにも瞑想に適している。

この付近の地勢はレー付近のものとは全くことなる。海底の厚い堆積層がプレート・テクトニックな力で押し上げられ、褶曲でバリバリ割られた地層が水と風で侵食を受けたこ



Nun 峰 7135m

とが想像される。ラマユル付近の風景はフトラ峠(Futola 四一〇〇m)を過ぎるあたりまで続く。ラマユルやフトラ峠付近からのトレッキングも面白そうに見える。

フトラを越え、次のナミカラ峠(Namikala 三七二〇m)過ぎてカルギルに向かう渓谷は、地質の専門家には興味深そうな地形が続く。ガイドの話では、ナミカラとカルギルの中間付近、磨崖佛で有名なマルベック付近がチベット仏教とイスラム教の境界とされている。カルギルの宿舎ホテル・シアチェン着一四時二〇分。

カルギル(二七〇〇m)はレーとはまた異なった雰囲気のだ。観光色より、地方の物産集散地の感じが強い。此処はインド・パキ



Z1 6181m

スタン戦争当時、パキスタン軍の砲撃にさらされたそう。ここは停戦ラインにごく近い町である。

ホテルはそれほど程度が悪いとは見えなかったが、此処で八太が腕を二箇所刺され、その後何日か腫れや痛みが悩まされた。虫除けは難しいが注意が避けられない。

九月一日(土)、いよいよザンスカール入りの日。カルギルからパダムまでは距離約二五〇km、悪路と見られるので、早朝四時三〇分出発する。道はインダスの支流スル河(Suru)に沿って遡る。地形は幅の広いU字谷となっている。谷に沿って農地がかなり深くまで入っており、またカルギル付近からいろいろとトレッキングルートを選べそう



Ramgdum Glacierの鋭鋒

イドの話では、ペンシラ峠へ至る途中にイスラム教域とチベット仏教域の境界があるとか。我々の車は知らない間にザンスカール地域に入った感じだ。

ペンシラを下り、パダムに近づくと谷は一段と広くなる。のどやかな感じは思わず「笹ヶ峰を大きくしたみたいいな所や」との言葉が口について出た。パダム着、一八時二〇分。

(つづく)

スコットランドの山に登る

中島道郎

去る平成一九年一〇月三日より七日まで、スコットランドのアビモア (Aviemore) で開催された「Mountain and Wilderness Medicine World Congress 2007」という、登山医学関連の国際会議に出席し、その最終日、会議エキスカーションのケアンゴーム山 (Cairngorm 一一四四m) 登山組に参加し、そのついでに翌日、英国最高峰のベン・ネビス山 (Ben Nevis 一三四四m) にも登ってきたので、瞥見したスコットランド・ハイランドの一端をご紹介します。

筆者は一九八一年、当時の日本山岳会医療委員会のメンバーを中心に、日本登山医学研究会を発足させ、英語名を「Japanese Society of Mountain Medicine (JSM)」と名乗ったが、驚いたことに「Mountain Medicine」を名乗る Society は世界でこれが最初だったので

ある。その後、一九八五年に至り、スイスで International Society for M.M. (ISM) が発足したので、筆者も加入した。以来、各国にそれぞれの国名を名乗る登山医学会が次々に誕生して現在に至っている。またこの登山医学世界会議であるが、その第一回目が一九九四年にボリビア・ラパスで開催されて以来二年ごとに、第二回・ペルー・クスコ、第三回・日本・松本(一九九八年、筆者が主宰)と続き、今回のアビモア会議はその第七回目であった。この会議には、AACKから筆者のほかにも、松林公蔵、奥宮清人、石根昌幸、の三君が参加した。

このアビモアという町は Cairngorms 国立公園の入口にあるリゾート地で、大小ホテルが散在している。場所はスコットランドの地図上、インバネスとアバディーンを結んだ線のインバネス寄り三分の一の辺である(図1)。学会場は、豪華ホテル Mc Donald Hotel の施設の一部である「Aviemore Highland Resort & Conference Centre」であった。ここはメチャ高いので、我々は歩いて一〇分ほどの所にあるユースホステルに泊まったが、宿泊費に一〇倍近い差があり、設備・サービスを考えるとイギリスの旅は断然ユースホステルだと思う。実は昨秋のスノードン国立公園の旅でも、ユースホステルであった。

最終日一〇月七日はエキスカーションであった。松林君と奥宮君はそれに参加せず帰国し、筆者と石根君は Cairngorm 山登山組に参加した。一〇:一〇、会場からマイクロバスで出発。東へ約一〇km行くと、

ある。

ペンシラ峠 (Pensila 四四〇〇m) へ登るスル河の大屈曲点付近から、景観が一変する。スル河の左岸はヒマラヤの北壁であり、右岸はザンスカール山脈の南壁になる。スル河の右岸には当然氷河は無いが、左岸には各谷毎に氷河がすぐ其処まで末端が来ている。この付近の最高双子峰ヌン (Nun 七一二五m)、クン (Kun 七〇七七m) の大氷壁の姿をパニカル (Panikhar) で間近に望む。惹きこまれる景観が次々と展開される。スル河に流れ込むペンシラ峠までの谷にもいくつかのトレッキングコース入り口が認められる。ペンシラ峠はどこが頂点か分からない程広い平原である。高いところまで放牧地になっている。ガ

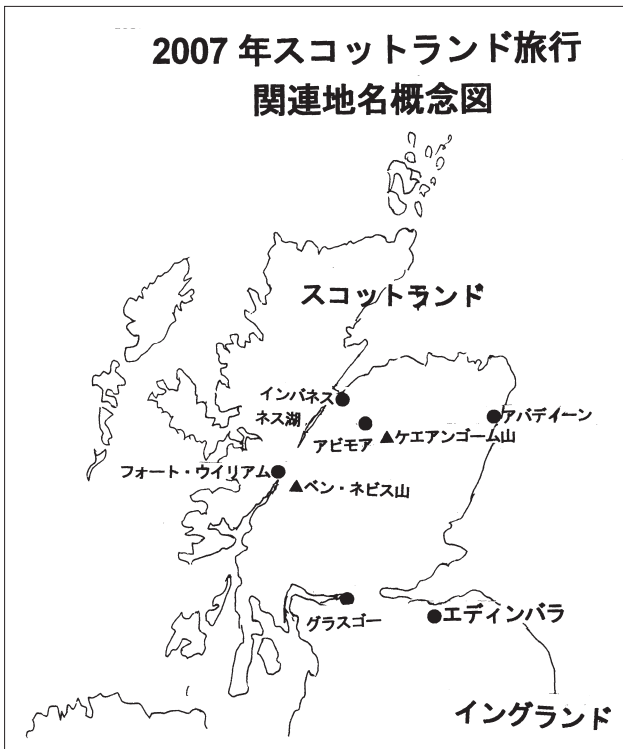


図1 スコットランド関連地名概念図

Loch Morlich という湖があり、その近くに Glanmore Lodge という日本の文登研に当る施設がある。三日にはそこで UIAA Medcom (国際山岳連盟医事委員会) の例会があり、筆者・奥宮・石根三名はそれに参加している。更に5kmほど進むとケーブル驛(標高六四〇m)があり、そこから登山が始まる。道はよく整備されていて歩きやすい。浅い谷筋を東南に約三・五km登るとカールの底(九二〇m)に着く。一一二〇〇(写真1)。そこで昼食の後、カールの岩壁と岩壁の間の急なガレ場をジグザグに登り、一一三二四五、稜線上のピーク・Stob Coire an t-Sneachda (一一七六m)に立つ。そこから眺めた東南方向の山々が写真2である。道は周カール稜線を北東に

約1km行った所から真北に転じ、尾根沿いに約3km下って一四二四五、出発点のケーブル驛に帰着した。これを尾根道に下りないで稜線を更に一・五km登ると標高一二四四mの Cairngorm 山頂に着くのだが、帰着時間一五二〇〇という約束であったので、最後の行程をリーダーが端折ったのである(図2)。一般に、スコットランドの山々は、なだらかで登りやすいが、その所々で氷河が作った岩壁が露出した所があつて面白い。余談ながら、ここにケーブル驛としたが、「ケーブルカー」は日本語で、英語で Cable Car といえど日本のロープウェイのことである。ならばここにあるこの登山電車は何というか、という Funicular Railway。語源はラテン語の Funiculus(臍帯)。「ト登山電車が出来たので『のフニクラは即ちこれである。翌八日は英国最高峰ベン・ネビス山に登った。これにはマーチンさんというガイドを雇った。UIAA Medcom 英国代表のヒルブランド博士に紹介して貰い、すでにメールで親しくなっていた間柄である。ガイド料は一日一五〇ポンド(約三五〇〇円)。これ

約1km行った所から真北に転じ、尾根沿いに約3km下って一四二四五、出発点のケーブル驛に帰着した。これを尾根道に下りないで稜線を更に一・五km登ると標高一二四四mの Cairngorm 山頂に着くのだが、帰着時間一五二〇〇という約束であったので、最後の行程をリーダーが端折ったのである(図2)。一般に、スコットランドの山々は、なだらかで登りやすいが、その所々で氷河が作った岩壁が露出した所があつて面白い。余談ながら、ここにケーブル驛としたが、「ケーブルカー」は日本語で、英語で Cable Car といえど日本のロープウェイのことである。ならばここにあるこの登山電車は何というか、という Funicular Railway。語源はラテン語の Funiculus(臍帯)。「ト登山電車が出来たので『のフニクラは即ちこれである。翌八日は英国最高峰ベン・ネビス山に登った。これにはマーチンさんというガイドを雇った。UIAA Medcom 英国代表のヒルブランド博士に紹介して貰い、すでにメールで親しくなっていた間柄である。ガイド料は一日一五〇ポンド(約三五〇〇円)。これ



写真2



写真1

ケアンゴーム山 周辺図

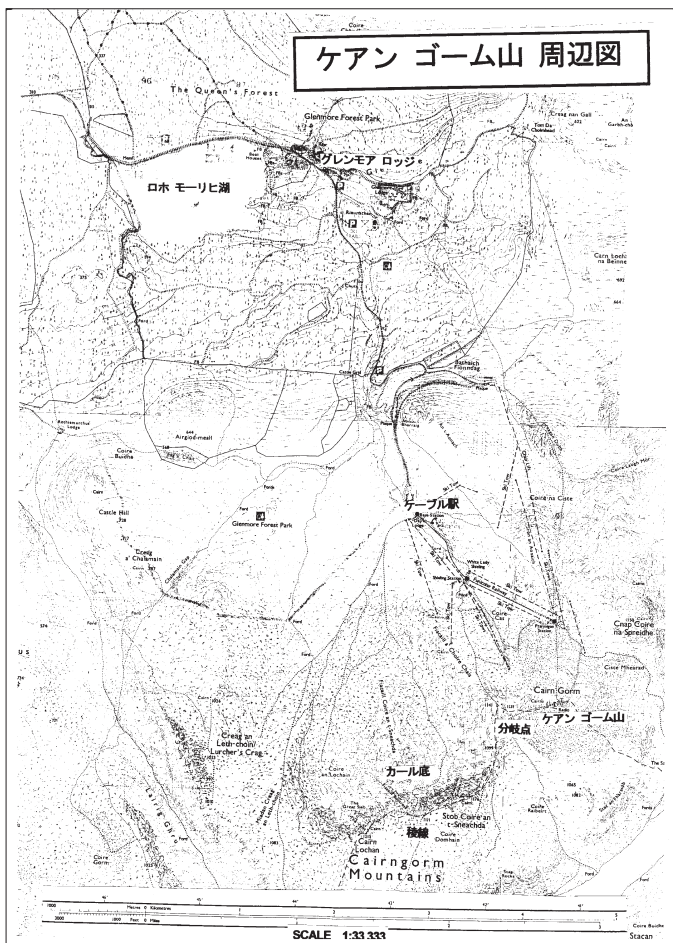


図2 ケアンゴーム山国立公園

ベンネビス山 周辺図

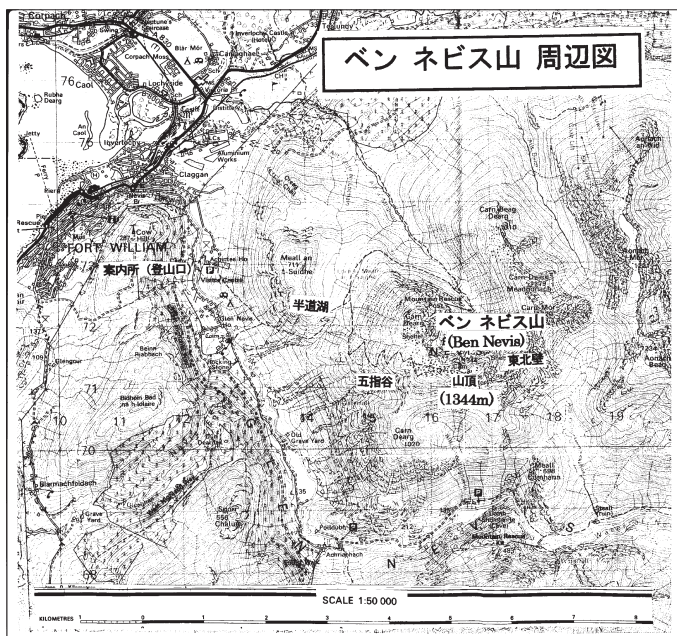


図3 英国最高峰ベン・ネビス山と、その周辺地図

は四人まで同一料金なので、石根君のほかに日本登山医学会員の堀井・国見両博士を引き込んだ。たかが一三〇〇m級の山にガイドとは贅沢な、と言う勿れ。彼はアビモアの宿から登山口、そして登山口からインバネスの宿まで計約二〇〇kmを自分の車で送迎してくれた。これがタクシー利用だと一五〇ポンドを上回る。また、バスや鉄道で移動、となると、膨大な時間と労力のロスになる。ガイドを雇うのはむしろ合理的なのである(図3)。

さて、ベン・ネビス登山は、フォート・ウィリアムからネビス川に沿って南東二kmにある案内所(ビジターセンター)から始まる。

〇九・〇〇出発。前山・Meall an t-Suidhe(三)う発音するのかな?)と本峰の間の鞍部にある池(Loch Meall an t-Suidhe、俗称 Loch Halfway)まで山腹を巻いてゆっくり登る(一〇:四〇通過)。そこから上、本峰斜面はやや急になり、道はジグザグになる。道面は粗い敷石道になったり、細かい碎石道になったり変化がある。はて?この碎石はどこからどう持ってきたものやら?と不思議に思う。この頃から周囲は雲に包まれてきて、見通しが効かなくなる。ガスの中を、右(南)は「Five Finger Gully」(Fingersでない点に注目)というガレ場と左(北)は「North-East

Face」という落差六〇〇mの大岩壁との間を進む。北穂の滝谷の感じである。進むうちに、広くて平らで、大きな岩の累々たるところに着いた。中央に円錐型の記念碑が立っている。一三・四五。ここが頂上だとガイドは言う。周囲には、測候所の廃墟など壊れた石壁建造物の址が数軒ある。登山客も案外多い。雲の中なので、何もすることはなかった筈なのに、ノートを見ると、かなり時間が経過しており、そこから引返して案内所に帰着したのが一七・三〇、となっている。下山の途中、ガスの切れたところで一行の記念撮影を撮った。下山したところで振り返りケアンゴーム

山を見上げた。空は綺麗に晴れているのに、山頂だけガスである。向かって右が登路の緩斜面、左が大岩壁。インバネスに着いたのは一九〇〇。スーパードゆっくり吟味しながら購入した夕食材料を持ち込み、その晩はインバネ・ユースホテルで盛大な打上げの宴を張った。

昨秋はウエールズ地方のスノードン山、今年はスコットランド地方のケアンゴーム山・ベン・ネビス山、と続けてイギリスの「名山」を踏破したわけであるが、おとなしい山容の中に、峻しい岩壁もあり、結構変化に富んでいる、という印象を受けた。読者諸兄におかれても、若しイギリスに旅行する機会があれば、ウエールズやスコットランドにまで足を伸ばし、一つ二つ山を歩いてくることをお勧めする。というのも、こういう、アルプスやヒマラヤとはまた一味違った山を旅することは、人生に別の彩りが加わって、またいいものだ、とつくづくと思うからである。

最後に、案内所で手渡しされた登山者への注意書きが面白いのでご紹介しておこう。

▲リンゴの芯、バナナやミカンの皮ひとつといえども、ゴミはすべて持ち帰る。

▲大地を傷めないよう、道から外れて歩かない。

▲事情やむを得ぬ場合でも、排泄は水源から少なくとも三〇cmは離し、排泄物は土に埋める。紙やサニタリー用品は持ち帰る。

▲記念物を残さない。ケルンは積まない。

▲火は地表を傷める。焚火は貴重な生物環境を破壊する。料理はストーブで行なう。

OKYAN'2007の報告

(兵庫県 砥峰高原と藤無山の山行記録)

潮崎安弘

毎年秋の恒例、「岡山の山を登る会」は専ら岡山県の山に登り続けて十年が経過、これを機に長年お世話戴いた寺本リーダー及び川崎幹事が辞任された。そこで今年からは残った高村・潮崎幹事に加え新たに井関氏に幹事をお願いして新幹事体制が発足、再スタートの運びとなった。但し対象とする山は隣接の兵庫県に転進、会の名称はこれまで通称で慣れ親しんだ「OKYAN」を正式名として採用する事とした。

今回挑んだ山は兵庫県西部、揖保川の源流で鳥取県境に近い藤無山(一一三〇米)。東は関東、西は九州から参加したメンバー総勢二五名が、去る一〇月二七～二八日、秋の好天に恵まれ全員無事登頂を果たす事が出来た。

第一日目の二七日、JR山陽線網干駅集合が午前十時半。現地のお世話になるバスに乗り込んで出発、一日目足馴しの目的地である砥峰高原に向かった。バス内では早速、赤穂在住でこの地域を絶えず歩いている川崎氏から、藤無山の山名由来を始めとしてこの地域に残る伝説についての講話があり、それに質問などで話はずんだ。何時もながら同氏の博識には感心する。道の駅「播磨いちのみや」

で一旦休憩、暫く地道を走り愈々山に入るが高度が上がるに従い霧と小雨になる。砥峰高原着が十二時五十分、バスは我々を残して元来た道を帰る。ここは関西でも数少ない広大なすすき原の高原で戦前・戦中は馬の放牧地。折から大陸に向かう軍隊用の頑強な馬が飼育されたと聞く。生憎の小雨なので県営「とのみね自然交流館」に入って昼食。紅葉には少し早い、すすき原をバックに全員写真撮影後、傘をさして周辺を個々に散策。十四時過ぎから福知渓谷を目指して下りのウォーク一時間強でバスの出迎え地点に到着。雨はいっしか止んで明日の晴天に自信が持てる。十六時過ぎには今夜の宿場、「フォレストステーション波賀」に到着。

入浴や休憩で時間が経過後、懇親会へ。斎藤ワイ氏の挨拶、中島ダンナ氏の乾杯を皮切りに座が盛り上がった所で、今回初の試みとして今年トライされた海外トレッキングや旅行のお話が始まる。幹事の責任で三氏にお願いしアドヴェンチャラスな経験を拝聴した。ここに三氏に感謝申し上げます。

奥村氏 南極クルーズ旅行 (十九年二月)

松浦氏 ラダック・ザンスカール

平井・薮内氏 ウズベキスタン旅行 (十九年八月)

翌二八日は期待通りの快晴。昨日と同じバスで八時半出発。藤無山登山口の若杉高原スキー場に到着後、登山開始は九時半。ここは小さいスキー場ながら温泉もあつて無雪期



えて我々だけの専用コッタージを借り切つて最後の宴会と懇談。まだまだ話は尽きぬが、遠く東京・福岡・米子にその日中に辿り着ける時刻が迫り、お開きとして再びバスに乗車、JR姫路駅で解散となった。

今年の参加者は斎藤ワイ、中島ダンナ、寺本シヨーチャン、平井ポコ、青野オンピキ夫妻、酒井オシメ、左右田ガンコ、松井サルタン、藪内ラシヨー、新井夫妻、奥村夫妻、川崎夫妻、高村デルファー、川嶋オレッチ、潮崎バイマン、高野ゴジラ、松浦コッテ、上尾井関、宝田ホーデン、野村オドの各氏。特に前日ウズベキスタン旅行から帰国したばかりの平井ポコ、藪内ラシヨー氏がお疲れにもかかわらず参加。更にラシヨー氏は遠く米子への帰宅の途中、大阪で一泊しての参加で全員の話題の中心となった。なお川崎氏にはアドバイザーとして、計画から現地行動のサポートまで多分のご協力を戴いた。

最後に今後の予定についての付記。次回も秋十月の最終週末、一泊二日で同じく兵庫県西部の山に登る計画でありますので、今回参加の方は勿論、新たに参加希望の方も多数のご参加をお待ちします。つきましては、計画が出来次第、事前案内を送りますので、ご希望の方で連絡先未登録の方は当方宛メールでご連絡を戴ければ幸いです。

潮崎連絡先 shiozaki@kcc.zaq.ne.jp

AACK人物抄

宮木靖雅

(一九四〇年四月〜一九七一年七月)

平井二正

これまで人物抄に登場した人物はすべて先輩諸氏であったが、ここでとりあげる宮木靖雅は、京大山岳部に一九五九年に入部した後輩である。不幸にして三一歳の若さでカナダ北極圏で遭難死するが、その短い生涯をパイオニアワークに徹して活動した。AACKという枠にとられない広い視野で、自分の志を遂行していった。

インドラサンの登頂者であると同時にAACKでは珍しい北極探検家であり、志半ばにしてカナダ北極圏で不慮の遭難死をとげたことを知る人も、今は少なくなつた。AACKにはこういう探検家もいたということを知ってもらいたく、ここに宮木を紹介する。(以下敬称略)

一、活動の軌跡

宮木靖雅は一九四〇年(昭和一五年)四月一五日生まれで、愛知明和高校を卒業し、一九五九年京大法学部に入部し、直ちに山岳部に入った。当時山岳部には部室に入りきれないほど部員がいて、国内の山はもろろん、国外の山も視野にいたれた未知に対するあふれんばかりの熱気は、多くの若者に心身ともに大きな影響を与えた。宮木のその後の軌跡は、

は、人工芝スキーコースを滑り下つた後、スキー共々プールに飛び込むモッグルスキーの練習場になっている。最初の登りは荒れた車道でスキー場のリフト分の高度を稼いだ後、本来の山道を登る事二時間で藤無山頂着。折からの快晴で鳥取県境に連なる氷ノ山や鉢伏山の他、北部の山々の眺望が素晴らしい。又北の遙か彼方の雲に浮かぶ真つ白の峰が見え、あれは白山か少し南の奥美濃の山か、やはり雲なのか論議があつたが結論は出なかつた。昼食後、例によつて酒井オシメ氏の雄叫びによるヤッホー唱和と写真撮影を済ませ下山を急ぎ、登山口無事帰着が十四時頃。迎えるバスで宿場に戻り入浴後、身だしなみを整

そういう土壤に大きく影響されている。

一九六二年にインドラサン初登頂に成功し、その後ネパールを踏査する。一九六四年京大法学部卒業、東レに入社、輸出部勤務、そのかたわら、六四年から南極の最高峰ヴィンソン・マッシーフ登頂計画に熱意をもやす。この計画は米国隊が初登頂して夢破れたが、その準備過程で知り合った関係から、一九六七年東海大学第三次ネパール探検隊東部隊長としてネパール、さらに西アジアを踏査。そしてさらに一九七一年東海大学カナダ北極圏調査隊の第二次隊行動隊長として北極圏ビクトリア島付近を調査。この活動中、カヌー転覆のため遭難死した。行年三三歳。姉一人、妹三人でたったひとりの男の子であった。白骨化した遺体が発見されたのは一九七三年のことであった。

(なお宮木はトクという愛称で呼ばれていた。山岳部同期で仲のよかった安原啓示が、アクというあだ名であり、二人合わせてアクトク(悪徳)にしようということからつけられた。)

二、インドラサン(六二二一m)(文献一)

彼の入学した年の前年一九五八年は、AAKがチョゴリザ初登頂に成功した年である。その映画が一九五九年の夏に封切られたこともあり、いやが上にも山岳部には、ヒマラヤへの熱気であふれていた。そしてAAKという組織にたよらず、山岳部の部員だけで海外遠征をしようという気運が高まってきた。そして誕生したのがインドラサン計画で

ある。

隊長小野寺幸之進教授、副隊長酒井敏明のふたりはOBであるが、以下大森、富田、田中、宮木、岩瀬はすべて現役という我が国大山岳部史上、画期的な隊であった。インドラサンは岩壁まじりの難峰で、それまで多くの隊を退けていた。

宮木はC3(五三〇〇m)から上部のオーバーハング気味の氷と岩の壁に何日もかけてルートを切り開いた。アタックの日、富田との会話…「トク、ようやったな」「そら、おまえ、しんどかったぞ」。この口調は宮木を遠い記憶から呼び起こしてくれる。急峻な氷壁をのぼり、宮木と富田は遂に頂上に立った。一九六二年一月二三日のことである。今で



インドラサンBCにて。後列右から2人目が宮木。



インドラサン壮行会にて 左から 宮木、大森、酒井、小野寺、岩瀬、富田、田中(この中で小野寺、宮木、富田、岩瀬はすでに鬼籍)

は高峰を岩壁登攀することは珍しくないが、当時は非常に先駆的な登り方であった。以後この山は長い間人をよせつけなかったが、一九七一年、イギリス隊によって第二登、それ以後数回にわたって登られている。

三、ネパール調査(文献二)

インドラサンの後、宮木はひとり二ヶ月ほどネパールを歩いた。当初五三年のアンナプルナ隊(今西寿雄隊長)らが越えたナムンパルジャン峠をこえることを計画していたが、季節がおそいためにこれは断念した。しかしカトマンズで知り合った神原達氏(当時外務官研修生)から同行のすすめもあり、マルシャンディ川の支流のナディコーラにあるナ

イチエという村で行われるアルゲンという珍しいお祭りを見ることにした。ポカラまで飛行機で、あとは神原夫妻ら五人で一五四kgの荷物とともにキャラバンを楽しんだ。

マナスル三山、アンナプルナ連峰などヒマラヤの景観を十分に満喫し、また途中L・テレイ、J・O・M・ロバーツなどに会っている。ナイチエでの五日間、村人と酒を酌み交わし、楽しく日々を過ごした。まだ多くの山が処女峰であった時代、ネパールでの一人旅はいやが上にも彼の思いをパイオニアワークに駆り立てたに違いない。

一二月六日にカトマンズに帰り、ここで東部ネパールバルン氷河からカンチエンジュンガ氷河を歩いてきた東京農大の向後元彦（東京農大探検部創設者）と運命的な出会いをする。お互い学生同志、ヒマラヤの夢を果たした若者同志、大いに意気があがった。そしてこの邂逅が彼の運命を大きくきめていく。

カトマンズで彼を待っていたのは、山岳部員加納洋の滝谷遭難の悲しい知らせであった。計画を変更して一六日にカトマンズを後にした。

四、ヴィンソン・マッシーフ（四八九七m）

（文献三〇五）

宮木は六四年、京大法学部を卒業し、（株）東レに入社する。そしてその年の秋、恋人昌代さんと結婚した。一流企業に就職し、家庭をもち、幸福な滑り出しであったが、彼の血はそこにおさまらなかった。

その頃再会した向後から、当時残された南

極の最高峰ヴィンソン・マッシーフ初登頂の計画に誘われた宮木は、この計画に燃え、夢をかけた。東海大学探検部設立者である星野紀夫も計画に加わった。関東のまとめ役が向後、関西が宮木、そして大学山岳部や探検部の海外登山経験者OBなど九大学から一人一人が集まった。

宮木が熱心に懇望して、西堀栄三郎が相談役を引き受けた。西堀は若い人の未知への夢をなんとかかなえてやりたいと全面的にバックアップした。当初リーダーは高橋照（全日本山岳連盟）を予定していたが、後に西堀の推薦で木下是雄（学習院大教授、JAC）になった。

如何にして南極に近づくか、それが問題であった。アメリカの南極探検家であり、木下の友人でもあるフィン・ロンネを日本に招き、その助言からデンマークの砕氷船を雇う交渉や、全米科学財団の支援を得るために茅誠司を通じての交渉など、国際的なスケールの大きい交渉は西堀、木下の力が大きかった。

最終的に三億円の予算で遠征は実現できるという段階まで行く。西堀はこの資金の調達に某大手宗教団体の事務局まで足を運んでくれた。

三億円の調達に難しいということから、YSIIを使う提案、サンチャゴまでの格安貨物船で行き、チリと合同登山で山に近づく提案など、あらゆる可能性を検討し、検討がなされた。向後は準備に専念するために職もやめた。

しかしアメリカ隊が全米科学財団からの支

援をうけて、C-130輸送機を山の直下まで飛ばし、初登頂に成功してしまった。

この壮大な夢が破れ、多くの若者たちはそのエネルギーのはけ口を、どこかへ求めなければならなかった。彼らは当初寄り合い所帯であったが、やがて同志的結合から身内の感覚で結ばれていく。そして計画の挫折後、この計画に注いだエネルギーの余波は、その後の若者たちの運命を大きく変えていくことになる。

向後は東部ヒンズークシユ、西アジア調査などを経て、紆余曲折の何年か後に、アラビアの砂漠の海岸線にマングローブを植林をする事業に打ち込む。この事業もヴィンソン・マッシーフ計画からの延長線上にあると思われる。

何よりも自分たちの実力を地道に向上させる以外に、夢をかなえる方法はないと考えた参謀格の宮本千晴は、六八年に東海大第三次ネパール探検隊に参加した学生たちが立ち上げた極地研究会の計画を全面的にバックアップし、北極探検を考えた。宮本は民俗学者宮本常一の長男で、都立大山岳部OBで、大阪府大、都立大合同、東ネパールシャルプ登山隊のメンバーでもある。

そして宮木は以下に述べるように、東海大第三次ネパール探検隊に参加した後、北極探検に彼のエネルギーをぶつけるのである。

ヴィンソン計画の中核であった向後、宮本、宮木らは熱心に学生の相談に乗り、計画を推進する大きな力になった。

ヴァインソン・マッシーフで敗れた夢を叶えるには、北極探検は宮木にとって、まさに絶好のターゲットであった。AACKという慣性の大きい組織は、計画を軌道にのせるまでが時間とエネルギーを要する。宮木はためらうことなく、南極から北極へ、さらにAACKから東海大へ舵を切った。当時京大山岳部には南極研究会があり、週一回集まって研究会を行っていたが、宮木は多忙のためか、この会合にはあまり積極的ではなかった。

話はすこし後に戻るが、ヴァインソン計画の夢やぶれた学生達は、六七年、第三次東海大ネパール探検隊を立ち上げた。隊長はヴァインソン計画の首謀者のひとり星野紀男（二五歳）、副隊長は宮木（二七歳）であり、隊員は九名である。そして西部と東部に別れて広くネパールを踏査した。この時代はネパール政府が登山禁止令を出したこともあり、登山活動は低調であった。宮木の踏査概要を参考までに示す。（街道憲久氏による）

六七年三月三〇日横浜港発、四月五日カトマンズ、四月一七日ピラトナガール、以下ダランバザール、ダンターク、ドブハン、タプレジョン、ヤルン氷河、ゲンサ、ドンゲン、ナムチャバザール、カトマンズ、現地解散、以後宮木はインド、パキスタン、カブール、ヘラート、テヘラン、クエッタ、などを歩き、神戸に帰ってきたのは一〇月二四日であった。

宮木は勤め人の身でよくこのような長期の休暇をとれたと、あらためて感心する。

宮木のこれまでの軌跡をたどると、インドラサン、ネパール、ヴァインソン・マッシーフ、さらにネパールから西南アジアと続く。彼のロマンを求めて突き進んでいく、ほとぼしるような情熱にうたれる。そしてネパールから帰国後、彼の情熱は彼にとって最後となった北極探検へ、確実に歯車は終局にまわっていく。次回は彼の運命を決した北極探検とその遭難に話をすすめる。

文献

- 一、京都大学山岳部・インドラサン登頂、河出書房、昭和三九年
- 二、京大山岳部報告、No.11、昭和三九年
- 三、向後元彦・ヴァインソン・マッシーフ—南極の最高峰、探検一〇号、京大探検部報告、一九六七
- 四、同：わが利己的遺伝子、科学、vol.76、No.6、pp.631-633
- 五、同：緑の冒険、岩波新書 一九八八

日本山岳協会・山岳共済の案内

AACK会員の皆さまへ、日本山岳協会が実施する山岳遭難共済制度への次年度の加入方法などについてのご案内です。平成二〇年度から制度や条件が少し変わり、死亡・後遺の保障金額が若干変更されました。山岳登攀コースでは、山行中の疾病（高山病を含む）が原因の遭難捜索費用も昨年度から原則支払

われることになっていきます。加入を希望される方は下記の要領で手続きを行ってください。山岳共済の条件として加入者は山行時に所属山岳会（AACK）へ登山計画書を提出することが義務づけられていますのでご承知おきください。

日帰りハイキングなどの軽登山をされる方には、軽登山コースが用意されています。このコースは山行計画書の提出は義務づけられませんし、保険料も安く設定されています。ハイキングといえども高齢の方にはどのような事故に遭遇するとも限りませんので、そのような方には万一に備えてこのコースがおすすめです。詳しくは後の説明をご覧ください。

なお、制度の運用に必要な業務は堀内潭様、阪本公一様に委託し、ご協力をいただいています。

AACK事務局 吹田啓一郎

一、山岳共済の種類

国内山行を対象に山岳登攀コースと軽登山コースの二つのコースが用意されています。

山岳登攀コースは八種類、軽登山コースは二種類のタイプが用意されており、それとは別に海外山岳共済の追加オプションがあります。

- (一) 山岳登攀コースは表1の八種類です。
- (二) 軽登山コースは表2の二種類です。初心者でも可能な一般登山道での普通の登山（夏山登山で雪渓を越えるために軽アイゼンを使用した場合も対応する）が対象です。そのため山行計画書の提出は義務づけられません。

ん。只、軽登山コースの場合は、山岳登攀コースと異なり、疾病が原因となる搜索費用は補償の対象となりません。

(三) 海外山岳共済

基本契約タイプの種類だけです。保険金額は次のとおりです。昨年と同様に、遭難搜索費用には緊急救助ヘリコプター費用も保証されることを確認しています。

死亡・後遺障害 百万円

救援者費用 五百万円

個人賠償責任 1億円

保険料は、対象の山岳、日数により個別に見積もられることになっていきますので、海外登山又はトレッキングに行かれる方は、事前に堀内様を通じ山行計画を提出して、保険料の見積もりを取得して下さい。尚、加入するためには、共済会に入会していることが必要です。参考までに、二〇〇七年の保険料の事例を示します。

(A) 阪本公一さん達インド・ヒマラヤのトレッキング(期間…三六日間)

一人当たり保険料一、四八〇円

(B) 安仁屋政武さん達コンロンの六〇〇〇m 台未踏峰登山(期間…二九日間)

一人当たり保険料七、二六〇円

(四) 山岳登攀コース、軽登山コースのいずれのコースも山行中のみならず、日常生活でのケガも補償の対象になります。

(五) 期間は毎年四月一日から翌年四月一日午後四時までです。中途加入も受け付けられません。

表1 (山岳登攀コース)

タイプ名	保険金額			
	1 S	S	1 B	B
死亡・後遺障害	100万円	100万円	162万円	162万円
遭難搜索	100万円	100万円	150万円	150万円
入院(1日)	1,000円	0	1,000円	0
通院(1日)	600円	0	600円	0
個人賠償責任	1億円	1億円	1億円	1億円
保険料	5,820円	3,530円	7,490円	5,200円
共済会年会費	1,000円	1,000円	1,000円	1,000円
合計金額	6,820円	4,530円	8,490円	6,200円

タイプ名	保険金額			
	1 C	C	1 E	E
死亡・後遺障害	238万円	238万円	500万円	500万円
遭難搜索	200万円	200万円	500万円	500万円
入院(1日)	1,500円	0	2,500円	0
通院(1日)	900円	0	1,500円	0
個人賠償責任	1億円	1億円	1億円	1億円
保険料	10,440円	7,000円	21,680円	15,950円
共済会年会費	1,000円	1,000円	1,000円	1,000円
合計金額	11,440円	8,000円	22,680円	16,950円

表2 (軽登山コース)

タイプ名	保険金額	
	I	II
死亡・後遺障害	184万円	284万円
救援者費用	300万円	300万円
入院(1日)	2,000円	4,000円
通院(1日)	0	1,700円
個人賠償責任	1億円	1億円
保険料	2,000円	5,000円
共済会年会費	1,000円	1,000円
合計金額	3,000円	6,000円

二、加入の手続き

加入を希望する方は、必要事項を明記した加入申込書を、A A C Kの指定する山岳共済担当者(堀内潭様)に提出し、指定の銀行口座に会費を振り込んでください。

(一) 加入申込書には次の八項目を記入してください(書式自由)。

- ①氏名(フリガナ)
- ②生年月日、満年齢
- ③郵便番号と住所(フリガナ)

④電話番号、FAX番号

⑤電子メールのアドレス（ある場合）

⑥職業名・職種名

⑦加入コース・タイプと海外山岳共済の追加希望

⑧同種の危険を補償するための他の保険契約があるか

⑨過去三ヶ年間に病気・ケガで保険金（五万円以上）を請求又は受領したことがあるか

担当者の連絡先は次の通りです。できるだけ電子メールでお送り下さい。

電子メール：

FAX：

郵便：

(一) 保険料・会費の振込口座（申込みと同時）に振り込んでください

銀行：池田銀行 川西清和台支店

(店番号335)

口座番号：普通預金

名義：

(三) 年間を通じての保険加入の募集締め切りは三月二〇日（山岳共済事務センター着）です。従いまして、毎年三月一〇日までに担当者（堀内様）へ申し込みと会費振込みをしいただければ、四月一日から有効となるよう手続きをします。途中加入も可能で、この場合保険料は加入月数に比例して減額されません。詳しくは担当者にお尋ね下さい。なお、手続き完了の翌月に日本山岳協会から一般共

済会員証が担当者に送付されてきますので、担当者から本人に転送します。

三、加入者の山行・登山計画書の提出

加入者は山行時に次のことを守って下さい。

(一) 山岳共済の適用を受けるには、日帰りハイキング以外のすべての山行（沢歩き、岩登り、積雪期の登山、及びすべての泊まりがけの山行）で登山計画書を提出する義務があります。

(二) 登山計画書には次の事項を記入して下さい。

登山目的、日程、ルート、メンバーの氏名・年齢・住所・電話番号、留守本部、最終下山日、共同及び個人装備、食料（実働・予備日明記）

(三) 登山計画書の提出先は阪本様です。できる限りワープロなどで作成したファイルを電子メールに添付して

へお送り下さい。できない場合は、下記の自宅へ郵送して下さい。

(四) 下山後、阪本様へ速やかに電話やメールで下山報告をしてください。

(五) 阪本様が担当するのは登山計画書のとおりまとめ、留守本部ではありません。留守本部は必ず山行計画者が自己の責任で定めてください。万一の事故発生の際の捜索救援体制も、山行計画者が事前に検討しておくべきことであることをご承知ください。

(六) 登山計画書を提出しない方は次年度の

加入をお断りします。

(七) 山岳共済に関する疑問点や、更に詳しい説明が必要な場合は、担当の堀内様にお問い合わせください。また、日本山岳協会のホームページにも説明があります。

<http://www.jma-sangaku.or.jp/sangakukyousaikai/>

以上

事務局連絡

AACK海外登山・探検助成制度の案内

現在、二〇〇八年度のAACK海外登山・探検助成の募集中です。詳しくはニュースレターの四三号にてご案内しています。奮ってご応募下さいますようご案内いたします。

AACK事務局

会員動向

会員異動

編集後記

登山人口の高齢化はAACKも同じ。巻頭のラダックトレッキングのメンバーの平均年齢は六九歳とのこと。それだけにヒマラヤへの取り組みには相当慎重であったようだ。寄せられた紀行文でも前半は高齢者の高所山行について詳細に報告されている。執筆いただいた松浦祥次郎さんから適当に端折って下さいとのことであったが、高齢化した会員の参考になればと、トレッキングの紀行は次号にまわして前半部を割愛せずに掲載させていただいた。

このニュースレターによる情報伝達の効率をよりよくするために、以前のように発行月を四月、七月、一〇月、一月に戻したいと思っています。徐々に発行を早めて軌道に乗せますのでご協力お願いします。

次号は五月中旬までに発行したいと思っておりますので原稿の締め切りを三月二〇日とします。

(前田 司)

編集委員 前田 司

発行日 二〇〇八年二月末日

発行所 京都大学学士山岳会

千六五―八五四〇

京都市西京区京都大学桂

京都大学工学研究科建築学専攻

吹田啓一郎 気付

製作 京都市北区小山西花池町一―八

(株) 土倉事務所